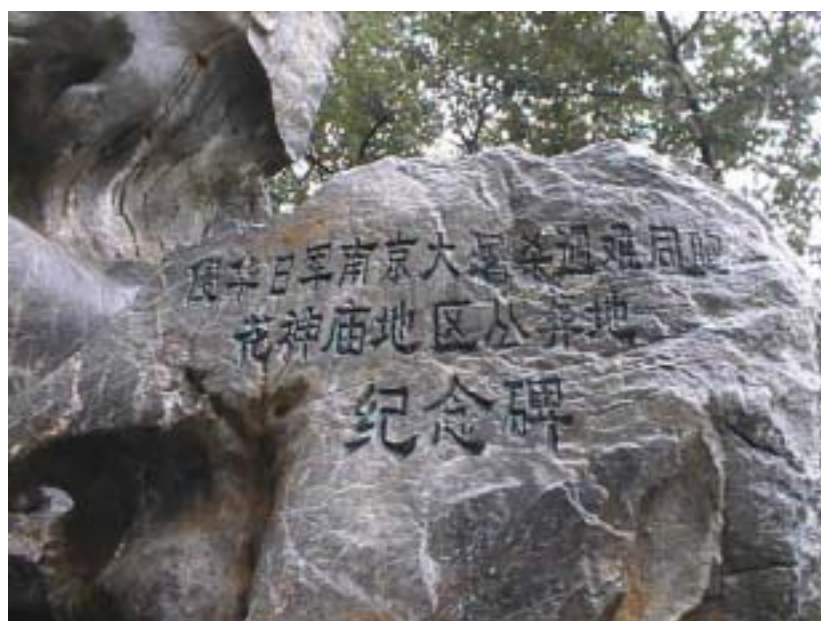


# 神戸・南京をむすぶ会 第6回訪中国の記録－南京・重慶 2002・8・14～21



神戸・南京をむすぶ会（中国語名・神戸南京心連心会）  
代表・佐治孝典 副代表・佐藤加恵、林同春

〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1  
神戸学生青年センター内  
TEL 078-851-2760 FAX 821-5878  
E-mail hida@ksyc.jp  
<http://www.ksyc.jp/nankin/>

2002年9月20日 報告会用仮報告書として30部作成  
9月21日、改定版30部作成  
2004年6月11日 PDF ファイル版をつくってHPにはる

=====

**神戸南京心連心会 第6次訪中国の足跡 2002年8月14日～21日**

=====

14日(水)晴れ	12:00 精進料理の昼食(緑柳居)ー1時間25分
11:30 メンバー全員集合する20名(関西国際空港11番ゲート)	13:25 デパートで買い物ー30分
13:48 離陸(中国東方航空505便)	14:05 バス出発
15:45 着陸(上海空港)ーなつかしい戴さんの出迎えを受ける 現地時刻14:45	14:45 長江大橋見学ー45分
15:40 バス出発	15:38 煤炭港記念碑ー5分
17:10 梅村にてトイレ休憩ー15分	15:50 中山碼頭記念碑ー10分
19:20 南京着 中山門をくぐる	16:00 挹(手へんに邑)江門記念碑ー30分
19:30 夕食(明宮大酒店)ー1時間	17:25 草鞋峡記念碑ー15分
20:35 ホテル着(希?頓飯店)	18:35 夕食(蘇姑大酒店=昨年インタビューに答えてくれた小姐のいる店)ー1時間50分
	20:20 孔子廟付近で自由行動、買い物を楽しむー40分
15日(木)雨	21:10 バス出発
08:00 バス出発	21:30 ホテル着 馬さんとお別れ
08:30 「侵華日軍南京大屠殺遭難同胞記念館」着 追悼式典、館内参観、映画鑑賞ー1時間50分	17日(土)晴れー今日から同行通訳 朱寧生さん
11:20 夏淑琴さんの証言を聞く 記念撮影ー1時間10分	09:20 バス出発
12:37 バス出発	09:55 燕子磯見学ー1時間 帰り際に車いすに乗った両足のない90歳のおじいさんに会う。元国民党の兵士だったそうだが、戦争のことは話しながらなかった。
12:45 昼食(金陵飯店)ー1時間	11:18 昼食(良子大酒店)ー1時間 佐藤団長「北国の春」をカラオケで熱唱
13:52 バス出発	12:14 バス空港へ出発ー車中重慶爆撃について門永秀次解説
14:14 雨花台の南に新しく(2001年12月)できた記念碑	13:50 南京空港着 戴さんとお別れ
「侵華日軍南京大屠殺遭難同胞花神廟」を訪れ、黙祷をささげる	15:50 重慶空港着 現地案内ガイド張偉一さん
14:26 バス出発	16:45 ホテル着(人民賓館)
14:36 中華門着 参観ー40分	18:15 重慶市内および長江、嘉陵江、重慶大橋見学ー15分
15:17 バス出発	18:40 火鍋料理の夕食(重慶揚子江假日飯店)ー1時間25分
15:41 南京博物館見学ー40分	20:08 バス出発ー途中スーパーに立ち寄るために停車中、小さい食堂の前で客の注文に応じてうさぎをさばいているところを目撃
17:19 バス出発	20:30 ホテル着
17:49 夕食 記念館主催によるレセプション(鳳西賓館)	18日(日)晴れ
18:50 やっと乾杯	09:10 バス出発
20:10 レセプション終了	09:15 朝天門見学ー15分
20:15 バス出発	10:00 重慶博物館見学(枇杷山)ー1時間30分
20:45 ホテル着 足つぼマッサージ組とスーパー買い出し組に分かれる	11:35 昼食(重慶賓館)ー1時間
16日(金)雨のち曇り	12:45 新華日報社旧址見学ー30分
08:40 バス出発 本日馬俊さん(小城智子さんのペンフレンド)が同行	
09:30 栖霞寺見学ー1時間半	
11:00 バス出発	

13:15 芳瑟堂カトリック教会見学ー10分  
13:25 大韓民国臨時政府記念館ー45分間 通訳  
は飛田秘書長  
14:30 周公館＝八路軍重慶弁事処旧址見学ー30  
分  
15:00 桂園ー重慶紅岩革命記念館見学ー20分  
15:30 宋慶齡舊居陳列館見学ー40分  
16:23 鵝嶺公園散策、三峡ダム工事計画の展示説  
明ー20分  
18:00 ホテル着  
19:00 ホテルで夕食  
20:00 バス出発  
20:20 朝天門大酒店で「巴国風」という劇団の演  
劇やサーカスなど見学ー1時間30分  
22:00 ホテル着

19日(月)晴れ

08:30 バス出発  
09:00 重慶市文史館にて「歓迎日本神戸友好訪中  
団重慶爆撃史実座談会」3時間20分  
12:40 ホテルにて交流昼食会ー1時間20分  
14:30 バス出発  
14:40 較場口の「六・五隧道惨案旧址」を訪れ、  
花輪と黙祷を捧げる。ものすごい数のマスコミの取材  
を受ける。  
15:12 十八梯近くの大空洞を見学(工事中で入れ  
ず)  
15:45 バス出発  
16:15 蒋介石の別荘「雲岫楼」＝「黄山陪都遺跡  
陳列館」、および「草亭」＝「重慶大爆撃資料展覧室」  
を見学ー1時間15分  
17:30 バス出発  
18:45 豪華遊覧船で食事と両江見学、デッキで日  
中友好の市民交流カラオケと盆踊りー3時間15分  
22:15 ホテル着

20日(火)雨のち晴れ

09:30 バス出発  
10:15 中美合作所集中營旧址渣滓洞監獄見学ー45  
分  
11:05 バス出発  
11:40 昼食(友好飯店)ー1時間15分  
12:55 バス出発  
13:30 重慶空港着 張さんとお別れ 門永三枝子  
体調不良で車いす使用  
13:55 離陸  
16:10 上海 紅橋空港着陸

16:50 バス出発  
17:20 ホテル着(上海九龍賓館)  
19:00 ウイグル料理の夕食(上海佳華酒楼)ー1  
時間  
20:00 上海の夜景見学、南京楼で買い物  
22:30 ホテル着

21日(水)晴れ

05:45 モーニングコール  
07:10 バスでホテルを出発 車中で旅行の一言感  
想を出し合う  
07:30 紅橋空港に到着 朱さんとお別れ  
09:57 離陸  
11:45 関西空港着陸 日本時刻12:45  
13:30 解散

門永三枝子 記

#####

南京・重慶に思う

宮井 正彌（みやい まさや）

学生時代から日本の戦争責任を考え続けてきた。そのなかでいつからかは忘れたが、南京における日本軍の行為についても知るようになった。また、すでに廃刊になった「朝日ジャーナル」という雑誌の1987年1月から1987年12月まで50回にわたって、前田哲男の「戦略爆撃の思想／ゲルニカ-重慶-広島への軌跡」という記事が連載された。この記事で重慶という都市とその世界的な戦略上の意味を知った。重慶で日本軍が投下した焼夷弾が木造家屋に有効であることを停泊中の艦船からアメリカ軍が見ていて、皮肉なことにそれを何年後かの日本への爆撃に用いたということを知られ、なるほどと変に関心したことを思い出す。

訪れた南京・重慶はおおむね予備知識の通りであった。むしろ、日本ほどではないが、中国においても戦中の出来事はいささか色褪せてきているのではないかと思った。慰霊碑にも年月が感じられ、むしろ建築ラッシュの蔭で風化しつつあるようにも見えた。おそらく以前は残っていた被害の跡もこのラッシュの波の中に飲み込まれていったのであろう。

国際紛争の解決の手段として武力を用いない、とするわが国の憲法はいつの間にか、もはや問題にもされなくなってしまう、国内（とくに沖縄）の米軍基地、ガイドライン、日の丸・君が代、靖国神社、有事法制、が大手を振って歩いている。この国は歴史に学ばない無思想という点において戦前といささかも変わっていない。

自分たちは正しいのだから、何をしても許される、それは信念にもさせられるという洗脳は明治に始り昭和に至って完成された。その根拠となった日本の近代天皇制、天皇教、天皇はこの国を造った神の子孫であり神であり、その神のために命を捨てることが子たる民の生き方であると教え込まれ、それをそのまま信じ込んできた残像／残響は今も深く残る。この近代天皇制の呪縛を解くことなしに、過去の出来事をいくら語り継いでも進展はない。

中国とは比較にならないほど日本の爪痕が甚大であった韓国／朝鮮を訪ねるつもりでいる。そしてそこで得た資料を日本語に訳す語学力を習得すべく目下勉強中である。

#####

第6次訪中国に参加して

門永 三枝子（もんなが みえこ）

有事法も憲法の改「正」も射程距離に入ったといわれるこの夏、わたしにとっては7回目となる中国を訪れることができました。今年の南京は、全市いたるところが工事中で、大きな道路も平気で通行禁止にするあたりがとても中国らしいと妙な感心をしてしまいました。初めて中山門の上から南京の町を眺めたこと、雨花台の南の花神廟記念碑の付近が東郊葬地に似ていたこと、車がきれいになって数も増え、孔子廟界隈が整備されていたことも印象に残っています。

しかし、煤炭港、中山碼頭、草鞋峡、燕子磯の記念碑あたりの様子は、毎年訪れても少しも変わりません。長江の水を見ると、かわべりに流れ着いたであろう累々とした死体が目に浮かびます。この場所で決意しなければならないことは、2度と再び同じ過ちを繰り返さない国にするということだったはずなのに、精一杯の運動にもかかわらず、年々露骨な反動化が進んでまた新たな戦前かと思われる状況となっています。

9人家族中7人が日本軍に殺された夏淑琴さんの体験証言は聞くのもつらいものでした。

小さいわたしたち（8才の夏さんと4才の妹）は、「助けて」と叫ぶ以外なかった。「うるさい」と言って3ヶ所刺された。傷口に灰をつけていたが、何年も治らなかった。1才の妹は床にたたきつけられて死んだ。

8才の少女の眼前でくり広げられた惨劇と、残された彼女のその後を想像しただけでことばを失ってしまいます。夏さんはとても冷静に話されましたが、途中「もう泣かないと何度も決心したけど、話し出すと涙が出てくる。」と言って、目じりをぬぐいました。

どうしてこんな犯罪に対して「戦争中のことだ」とか「悪い面ばかりではなかった」とか言えるのでしょうか。愛媛県では「新しい歴史教科書を作る会」の教科書が採択され、事前にその採択を求める署名が三十万筆以上集まったそうです。ハンガーストライキをして阻止しようとした反対側の集会200名に対して、採択を求める側の集会は小林よしのりが招かれ800人以上集まった

そうです。しかも若い人がほとんどであったとか。

重慶へ向かう飛行機でとなり合わせた中国の青年は「日本の政府が歴史の真実を知らせようとしていないことをどう思うか」とたずねてきました。即答できない自分と、そういう国であるとするに思い浮かべられる日本の国の現状と言うものにあらためて気づかされました。

重慶は心に残る街でした。1台の自転車も見ない坂と階段の街。他の町と同様活気にあふれ、船やホテルでも親切な人々と接することができました。でも、いたるところに防空壕（防空洞）があり、そこに「住みつく」と言う言葉がびったりするような暮らしぶりの人々。バスから降りると必ず小さい子が地図を買ってと寄ってくる貧しさ。「棒々」とよばれる天秤棒をかついだ労働者の姿は、まさに苦力（クーリー）を思い起こさせます。この町に3年にもわたって連日空爆が続けられたのかと思うと、やりきれない気持ちになりました。

1万人が窒息死したと言う十八梯の大きな防空壕と、有名な「重慶大爆撃」の写真そのままの階段も間近に見ました。空を見上げてみると、そのときに壊れたまま時間が止まっているのではないかと思われるような廃屋が目飛び込んできました。人が住んでいると言うから驚きです。

何しろ、団地で記念碑を訪れたのはわたしたちがはじめてとのこと。2日目にはたいへん盛大に「歓迎交流座談会」が開かれました。そのとき上映された当時の日本の戦争鼓舞映画、例の「大本営発表」で始まりますが、「今日は絶好の空爆日和」と、ひときわ明るい声が流れたとき、たまらないほど人間性を失わせる戦争の犯罪性を感じました。

60年前をしのび、嫌でもいまに引き戻される、そんな繰り返しでしたが、重慶の町から空を見上げることができてほんとうによかったと思います。また来年も中国へ行けますように。こんどは暴飲暴食を慎みます。みなさんありがとうございました。

#####

**衝撃的な夏淑琴さんの証言**

**宮井 久美子（みやい くみこ）**

この度は仕事の夏休みを利用して、中国の南京大虐殺事件の study tour に訪中団の一員として参加できました。

大量の虐殺が行われた南京市江東門外に「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」がありました。本の写真では見た事がありましたが、現実に目の当たりにして、まず「屠殺」と言う中国側の捉え方には何とも言えない気持ちになりました。正面には「犠牲者30万人」のプレートが埋め込まれ正確に歴史の事実を伝える為に1985年に建てられたとのこと。記念館の内部には殺人、強姦、放火、略奪などの事実が写真や証言で展示説明されていたり、現場で掘りおこされた遺骨の展示、中庭には日本軍の残虐行為を刻んだレリーフなどが置かれ、被害者の立場を終生忘れることなく子々孫々にまで伝えていこうとする国の執念がはっきりと窺えました。これに引き換え、日本人の多く（自分も含めて）はあらゆる事件を知らされる事も知る事も無く過ぎて行く人種なのかと思うと腹立たしくさえ思いました。

夏淑琴さんの証言は衝撃的で、日本軍が犯した惨たらしい残虐行為の罪をどのようにしても拭えない事実にとただ、言葉がありません。

どこでも、簡単に「世界平和」と口にはしますが、それじゃ具体的にどうするのか？それは、とても難しい問題を投げかけられたことになりました。

今回の追悼集会のことをある保護者に伝えたとこインターネットで人民日報の8月16日の日本語版に記事のみあったと伝えてくれました。回りの人々にも関心を持ってもらうことが私の微力ながらできることであると感じました。

#####

**初めての重慶**

**小城 智子（こじょう ともこ）**

南京でも、生存者の話を聞くたび、また、記念館の展示、とりわけ100人切りの当事者や日本の報道の様子っを見るたび、やはり日本の責任の重さと、今の私たちにどうつなげて行くのか、と宿題をいっぱい感じてしまう。

初めての重慶でも、重慶の三峡下りに来る日本人は多いが、空爆の跡地を見に来る日本人はわずか、しかも研究者や市民団体の人が数人、とか。私たちはたまたま教員学生を中心に20人という事もあり、重慶市の報道陣が大勢やってきてびっくりした。生存者の高さんや市の方たちと、防空壕跡地を見て回った時も伝えていく責任を重く感じた。今も残されている防空壕は、ソ連と一

時緊張関係にあったときにまた、整備されたということだが、今も倉庫や住居、店などに使われていたりする。6、5 惨案の較場口隧道は、地下鉄に転用されるということで、工事中だったが、入り口の一つの銀行前には記念碑が立てられ、当時の写真が中に掲示されている。また、銀行の壁には苦しむ人々のレリーフがある。同行した、新聞社で研修中という師範大学3年生の陳さんは、子どもの時から、空爆の話は聞いていて、39年の5・3 5・4も41年の6・5 惨案も知っている、という。学校できちんと習うのは中学生になって歴史の時だ、と言う。親や周りの大人が話し、こういう場所にも行く、という。日本の空襲や広島長崎はこのように語り継がれているだろうか。

18 歳の階段を下りていくときに、両側に並ぶ店に気を取られていると、やはり研修生の一人が、階段に黒く灰になった小山を指さして、遺族が6・5 や8・15 (解放記念日) にやってきて、祀るのだと教えてくれた。この階段に何百人もの人々が折り重なって倒れていたと思うと、何ともいえない。地下鉄工事中の防空壕入り口は大変大きかった。入り口はすでに外開きに変えられていた。

南山区という重慶空爆の激しかったところから少し離れた長江対岸の山の中に、蒋介石の別荘があった。ここにも、台所の床から防空壕に抜けられるようになっていたという。その手前に草亭という小さな家があり、そこには重慶空爆の写真展と資料が展示されていた。南京大屠殺記念館と比べると本当に小さな場所だが、誰も来ないのかと思うと、若い二人連れなどが訪れていて驚いた。

市内でも、蒋介石の住まいや、曾家岩50号周公馆と言われる周恩来の住まい(隣には国民軍の警察の見張り所があったそうだが)宋慶齡の住まいや桂园など見学させてもらったが、それぞれに防空壕がついている。

たくさんの防空壕跡を見るにつけ、当時の空襲の激しさと緊張感を思い起こされた。今も子どもたちに語り伝えられるはずである。

広島に団長として行ったという王さんは、「広島では栗原君子さんの話が今も心に残っている。日本の軍国主義による侵略戦争でアジア人民へ大きな被害を与えたとともに、日本の人民にも大きな被害を与えた。その一つが広島20万人の被害である。だからこそ、平和を守る力を広げなくてはいけない」と言う。「広島では、日本人が被害者、ということ強く強調している。しかし、

なぜ原爆が落とされたか、もっと原因を考えるべきだ。被害者だけでなく、加害者だとわかってくる。平和憲法を修正して有事法を作ろうとしているが、戦争への道を一步ずつ進んでいるのが心配だ。」という指摘もあった。

重慶では、アメリカ参戦のあと、蒋介石国民党の共産党に対する弾圧が始まり、その負の歴史も保存されている。また、このように国を二分して国の力を弱めたことも大きな教訓にしているようである。

重慶に来て、日本軍の戦争史に残した「戦略爆撃」という思想を思うとき、アメリカがまた、イラク攻撃を狙い「戦略空爆」という系譜につながる戦争への道を突き進もうとしていることを、押しとどめたいと思う。今の時代には、戦前同様「空爆により殲滅」という事態の中身を考える豊かな想像力が求められている。ゲームではなく、生身の人の命と体、人間の生活が大量に壊されるのである。改めてこんなことを考えさせられた旅であった。

今回も高校生の姪に、皆さんが、いろいろと教えてくださり、様々な経験を広げていただき本当に感謝しています。若い世代の交流が進められ、若い世代がもっと正しい歴史認識が持てるよう参加者を広げていきたいものです。

#####

南京・重慶を訪れて

由 佳世子(ゆ かよこ、TOU JIA SHI ZI)

3年ぶりに訪中団に参加しました。しばらく中国から離れていて、訪中を決めたものの予習をする時間も持てずに気楽に出発の日を迎えました。

上海から南京のバスの風景もなんだか新しくて、中山門から夜の南京市へ。街は地下鉄工事の真っ最中。日中国交回復30周年の中国は、どんどん動いているなと感じました。

15日の南京大屠殺記念館での追悼集会は、あいにくの雨で屋根のある狭い場所で行われました。日中双方の報道の姿もありましたが、日本ではどのように語られたのでしょうか。記念館も3年前とは変わっていて新しい万人抗の建物や碑も増えていました。生存者の夏淑琴さんのお話は、家族が虐殺に合い当時8歳で妹と2人だけが生き延びることができ、現在までの生活を語られました。

重慶は5年前に1度訪れたことのある街で、坂

や階段の多い街という印象だったのですが、いたる所に大小の防空壕があり、現在はそこをお店や住居にしていました。当時、空襲警報ですぐに隠られるように生活を強いられていたのだらうと思いました。重慶の北西部の中美合作所は、当時は米国政府が国民党から日本軍の情報を得る特殊機関だったそうです。

1945 年以降は共産党員や革命家が連行され、女性や子どもまでも拷問を受けたり虐殺された場所だったということ。拷問の道具がいろいろ展示されていました。21 世紀、アフガニスタンでアメリカ軍によって、このような拷問があるので、と思いました。そしてこの場所でも大雨の中、多くの中国人の親子が見学に訪れていました。

今回、現在の中国文化を知る裏フィールドワークは、南京でのヒルトンホテルに始まり、良子足つぽマッサージ、茶芸館での実演、重慶での目の前で見た変臉（映画の早がわりよりもすごかった）長江クルーズなどなど、とても楽しい旅でした。

秘書長の飛田さん、初対面だったルームメイトの吉田さん、神戸団の皆さんいろいろとお世話になりました。

そして、来年は

我 想 説 中 文 ！

#####

無言の訴え

福島 俊弘（ふくしま としひろ）

戦後 57 年の今年は、南京大虐殺から 65 年、日中国交回復 30 年の年にあたります。個人的に言えば、8 月 15 日をアジアから見てきてちょうど 10 年目にあたる年でした。1993 年から 10 年間の「8 月 15 日」を海外でむかえてきました。しかもアジアの国で。93 年のソウルにはじまり、マレーシア・朝鮮民主主義人民共和国・中国といった国々でした。これらすべての国は日本の侵略戦争の犠牲になったところで、日本の戦後責任のあいまいさに翻弄されているところでありました。

1993 年は韓国ソウルのタブコル公園。タブコル公園は三・一独立運動の中心地であるがそこで集会を開いた時、白いパジチョゴリのおじさんがやってきて「日本人は帰れ」とすごい剣幕で怒鳴られたことが忘れられません。

94 年はマレーシアのジョホールバル。真珠湾

攻撃より前にマレーシア攻撃が始まっていたことをはじめて知りました。華人に対する一村全滅があちこちでなされ、それも差別意識を利用した戦略に驚きました。

95 年は朝鮮民主主義人民共和国の板門店とケソン。板門店では解放 50 年の統一集会が行われ、またケソンでは南北統一のためのデモ行進を 2 キロの道をうめた千人をはるかに超える市民と一緒に行いました。

96 年から 3 年間は韓国のテグ市で中ソ離散家族会の総会に参加。中ソ離散家族とは、中国やソ連のサハリンで家族親戚と離れ離れになって暮らしている家族会で、日本の植民地支配の犠牲者がこんな形で存在していることを知りました。

99 年は中国ハルビンの趙一曼公園。彼女は抗日烈士としてここハルビンで処刑された人です。この時は、東洋のマジノ線と呼ばれたロシア国境の虎頭地下要塞、鶏西市の河北万人坑、三光作戦の原型・集団部落の佳木斯市太平川などを訪問しました。

そして、2000 年からは神戸・南京を結ぶ会の訪中でした。南京の大屠殺記念館での追悼集会。00 年はハルビン、01 年は杭州、そして今回は重慶でした。第 16 師団歩兵 38 連隊の地元奈良に住まいをする一人として、南京は特に重いところです。

こうして 10 年間の 8 月 15 日をむかえたわけですが、アジアの人々は日本の戦後の動きを黙ってみてきたのではないことに気がつきます。確かに、日本の経済力を前にして強く出られない、小さくならざるを得なかったということもありましょいうが、常に注意深く見続けているといっているでしょう。首相や閣僚の靖国神社参拝や教科書問題、憲法改悪をはじめとする戦争体制づくりなど危険な動向は地元のメディアが大きく取り上げていました。むしろ日本国内よりも扱いが大きいといってもいいようです。「謝らない国・日本」を警戒するのは当然かもしれません。

今回、重慶無差別爆撃の幸存者である二人の証言（高健文さんと伍占琴さん）をうかがうことができました。高さんは足が不自由で伍さんは右手をなくされていました。伍さんは工場で爆撃を受けたそうで、多くを語らないまま服を脱がれました。若い人に自分自身を無言の証言者として紹介したい、と。

無言の証言は雄弁な語りより時として強き語りとなります。しかし、無言の証言を受け止める

認識や姿勢が求められてもいます。アジアの一員である私たちが、あたかもアジアの構成員でないかのようにふるまってはいいのかと、ふりかえる必要もありそうです。それ以上に、日本の歴史をきちんと学び直す責任もありそうです。重慶爆撃があったということをほとんど知らなかった私ですから。

#####

「百聞は一見に如かず」・・・でも  
宮内 陽子（みやうち ようこ）

南京については、ほかの方をお願いすることにして、重慶（チョンチン）について、今考えていることを書いてみたいと思います。

日本軍による重慶無差別爆撃については、もちろん知っていました。それが所謂、戦略爆撃として初期のものであり、ヒロシマ・ナガサキにつながるものであることも含めて。しかしそれはあくまでも「チョンチン・ムサベツバクゲキ」という無機質な知識に過ぎなかったということを、今回もまた悔恨と共に痛感させられました。「百聞は一見に如かず」と言いますが、やはり行って見ないと分からないものなののでしょうか。とすると、この世には一体どれくらいの、行かねばならない現場があるのでしょうか。

「私が生き証人です。」とだけ言って、シャツを脱ぎ、肘先からもぎ取られた二の腕を見せて立たれた伍占琴さん。「窒息して死んだ人がくるぶしを握っていたので、腐ってしまったのです。」とズボンをたくし上げて異常に細くなった足首を見せて下さった高さん。「忘れるなかれ」と刻まれたモニュメントを掲げた「6・5惨案」（1941年6月5日、日本軍の爆撃により、一万人にのぼる市民が圧死、窒息死した出来事）の現場、6500人を収容する防空壕にしては狭すぎる開口部に立つと、あの爆撃の下で何が起こったのかを60年前に遡ってほんのわずかですが、感じ取ることができました。

また、私たちの前を、身体を揺らし杖をつきながら歩く高さんの姿を見ながら、あれから60年以上、こうやって歩きつづけて来られたのだと思いどり、その若い日の嘆き、苦労をはじめとする過ぎてきた年月にあったであろうこと、取り返しよのない日本の過ちの重さも感じました。

「人の痛みは百年でも辛抱できる」という言葉があります。人間の冷たさ、どうしようもなさや穿

った言葉です。人間はそのような存在ですから、「一見」しなければ当事者のことを推し量ることすらできないのは、仕方のないことなのかも知れません。まして、「一見」してみようと思しなければ、理解や共感など論外です。（秋葉広島市長は今年、ブッシュ大統領に「ヒロシマに来てください」と呼びかけました。ヒロシマに来て見ることにより、核兵器廃絶への一歩が始まるのですから。）そうであるならますます、「一見」する機会を追求することは欠かせないことだと思います。

とはいえ「一見」しなくても、いえ「一聞」だけで、当事者のことを推し量り、その思いに寄り添える人間に、いつになればなれるのだろうか、現地研修のたびに思います。それが無理であることが分かっているから、せめて「分かりたい」という思いと「分かってない」という思いの狭間で、現場に立ち、証言に耳を傾けるのかもしれない。無念の思いを抱えて亡くなられた人々、また苦難を忍んで生きてこられた人々、その思いに少しでも近づくことが、平和への一歩だと信じていますから。

最後になりましたが、毎回気分的にもハードな旅を、それでも快適に、時には楽しく過ごさせてくださった団長、秘書長をはじめとする団員の皆様、そして、「TOP6の誓い」を忘れず参加してくださった坂東さん、吉田さんに感謝の気持ちを伝えたいと思います。有り難うございました。

#####

「中国日記」

荒武 麻由美（あらたけ まゆみ、在野真麻）

2002/08/16（金）相変わらず、我がままな旅人

今回の中国行きは「神戸・南京を結ぶ会」の一員に加えてもらっての参加であったが、タイをひとりで動いたときのような不安はないものの、やはり20人という単位の旅には、わたしのような個人主義者（我がまま者^^;）は何かにつけシンドイ思いをしなければならない。それに、食材も調理方法も豊かな筈の料理が、やはりほとんど食べられず、野菜料理や饅頭などを食べるしかなく、初めて行ったときにタイ北部で味わった苦痛が再び甦っている（笑）。まだ南京でしか食べていないが、肉も好物の魚も、とにかくほとんど食べられない。そうだ、そうだ、中国東方航空の機内食も、大変だったぞ！全国の鶏肉嫌いの皆さん、



中国東方航空で旅されるときは、お気をつけおそばせ！

なにしろ、選択肢が「チキン or ダック？」だもの（笑）。オイオイ、これって「鶏肉嫌いには一緒のものだよ」。あくまでもどちらかを選ぶように乗務員から言われて、「じゃあ、抜いてください！」というしかなかった真麻である。したがって、わたしの前に運ばれたプレートには、ちょっと気の抜けたような小さな巻寿司と、ただ塩辛いだけの野菜の煮物（カボチャ、アスパラガスなど）それに水、それにそれに...これがまあ、一番美味しかったけど、小豆で作った和風ケーキのようなお菓子。しかし、これは周囲を見渡すと皆さん食べ残しており、不評だったようだ。おまけに、サービスの飲み物といえばコーラとかビールだし、結局、いつもは飲むコーヒーもこなかった。それに、乗った途端に「あ、ボロ...」と思わず言ってしまうそうになったくらい、機内のところどころで、ペンキがはがれていたり、上海空港に着陸のときも、まだ地面に機体が着いていない段階で、「ドン！」と大きな音がするし（笑）。いやあ、これはコリアエアラインどころではございません。相当、機体に年季が入っているものと思われました。誰かが「旧ソ連のフロートに乗ったときはもっとすごかったよ」と言っていたけど...

さて、無駄話をしているとすぐに時間が経ってしまいます。準備しなくちゃ。

2002/08/17（土）はやくも南京最後の朝に...

中国は人口も日本とはスケールが違う。南京は確かに都会ではあるけれど、雑然としたところはあまりない。それでも、南京市中心部だけで250万人の人口、周辺部分を加えた特別市という自治単位でいうと600万を数えるという。もちろん、京都よりはるかに大きな町である。きのうは初めて夜の繁華街（日本で言うところの浅草のような場所だと教えられた）を歩いてみたが、バンコクのように物乞いの人々が屋台の一角を陣取って座り込んでいるということはなかったが、観光客（おそらく日本人狙いだろう）とみると付きまとってくる子どもや、親子連れの姿にも何度か出合った。わたしたちの歩いた場所が限られているので、一概に判断できないが、日本の都会やタイのバンコクほどあからさまなホームレスの姿を町でみかけることはない。しかし、ほとんどの家庭

が共働きで、いたるところ建設工事をしているこの南京でも失業問題は深刻らしいので、もう少しじっくり歩いてみないと...。その人口のせいか、たとえば交通事故でひとが一人亡くなっても、ニュースにもならないという土地柄のことだ、一概にはいえない。

なにしろ、2005年の開通を目指す地下鉄工事をはじめ、道路工事の現場で働く労働者は飯場と呼べるものがないのか、工事現場脇に簡易テントを張って寝泊りしているようだ。朝早くおきて周辺をみてきた、わたしたちの訪問団のHさんの「証言」である。さて、わたしも、今朝は少し早起きしたので、出発の準備をしたあと、彼らと朝の散歩に出てみたいと思う。体調も少しずつ回復してきたので、朝の市場の様子などみてみたい。

2002/08/18（日）17日、重慶（ちょんちん）到着

南京から国内線（中国東方航空）に乗り、重慶（チョンチン）に到着。分厚い雲が切れて着陸間近になったとき窓から外を見ると、稜線に沿って作られた棚田が幾重にも連なる美しい田園風景が目に入り込んでくる思わず歓声。狭いけれど窓際席に座った者の特権でもある。どこか日本の山村を思わせる棚田の光景であるが、中国の場合は直線的に区切るのではなく、起伏のある地形をそのまま生かした曲線美の段々畑といえそう。

南京とはまたちがう眺望に、心洗われたが、チョンチンは長江（日本では揚子江といってきたが）上流最大の都市で、中国四番目の直轄市。空港から町の中心に至るまでの一帯にはバナナや芭蕉、蘇鉄といった南国の植物が植えられていて、ちょうど緯度でいえば日本の種子島あたりになるだろうか、かなり南の地である。それにしても、中国というところは何かにつけスケールが大きい。チョンチンは全体の人口が3200万人、うち都市部で1000万人というから、今朝までいた南京と比べても規模の大きい都市であることがわかる。ちょっとした国家並みである。勿論、面積2800平方キロメートルもあり、27～8はある少数民族からなる都市だと、地元でガイド＆コーディネーターを引き受けてくれる張偉一さんが教えてくれた。

この町は長江と嘉陵江という大河が合流する地点であり、水運に頼った昔から中国内陸部に入る交通の要衝として栄えたところ。そして、何よりもチョンチンの特徴は、起伏のある土地であり、

ここでは平坦な南京市内でたくさんみられた自転車ほとんど見えない。市民は圧倒的に徒歩である。中国＝自転車というイメージは描けず、代わりにバイクが重宝されているとか。SやHといった日本のモーター資本が車やバイクを現地生産しており、右側通行用の右扉バス製造も日本との合併会社。町には韓国資本の電子メーカーの看板も見受けられ、これがあの社会主義・中国なのだろうかと思ってしまったが…。WTO加盟ということで良くも悪くも急変貌していることは確かだ。

夕方訪れたチョンチンの長江大橋の袂では、中国地図を執拗に観光客に売り子子どもや女性が待ち受けていたが、南京の夜店のような物乞いの子どもたちには出会わなかった。わたしたちのほとんどは買わなかったが、買った人にみせてもらったら、結構重宝しそうな気もした。5元の買い物だったし、変に神経質になることもなかったかな？

2002/08/19 (月) 厚顔無恥な日本海軍のプロパガンダ映画

午前中、日本海軍による重慶爆撃の生存者の証言、運動団体の話、研究者の話を聞いて、食事のあといったんホテル(人民賓館)に戻ってきました。その席で日本海軍のプロパガンダ記録映画も観ましたが、「今日は絶好の空襲日和！」というナレーションが入るのにはあきれ返っています。中国の方々に前に、わたしたちは恥ずかしい思いをしています。これからまた重慶市内のゆかりの地を巡るフィールドワークです。

\* \*

2002/09/15 (日) あ、南京で...! ?

一ヶ月前の8月15日、わたしは中国・南京市にいた。戦争中の日本軍の犯罪をわたしたちの時代に明らかにし自らの問題として反省し、謝罪と責任を果たしていこうというわたしたちのツアーは、中国当局から好意的に受け入れられていたせいか、宿泊先も快適で、毎回の食事もゲスト用のレストランだった。それで、わたしはスタディツアーの企画をしている神戸のHさんに「とてもHさんたち(貧乏?NGO)の企画とは思えないっすね、快適!」と軽口を叩いていたものだ。しかし、その南京市で食中毒事件! ?とニュースのヘッドラインに驚いていたら、どうやら毒物混入の疑い...そこまで報道されたあと、中国政府当局

がこの件に関して報道管制を敷いている、という情報もあるようだ。考えてみれば、日中国交回復30年といっても、まだビザのいる国なのだが、何の問題もなく旅して帰ってきて、ようやく民間人の中国への渡航も盛んになってきたなあ、と思っていただけに少しショックである。

先月の旅が、わたしにとって意味のある貴重な体験であったことにはちがいないけれど、確かに少し不満に思ったこともあった。たとえば、中国政府が現在すすめてる長江の三峡ダム建設に関して、資料として展示された水没する地域の住民の写真には「移転先で喜んでいる」というキャプションがつけられていた。一枚のプリントされた写真には裁縫をする女性が写っていたが、その写真がキャプションにあるように、はたして「よこんでいる」のか「不安に思っている」のか、そんなことはプリントされた写真のなかだけでは読み取ることはできなかった。それでも当局の都合のよい解釈が施されてしまうのである。

それに、わたしたちが見せてもらった場所は、初めから当局のお墨付きの場所には違いなく、まだまだ個人旅行で自由に見てまわることは難しいとも聞いた。そんな状態なので、もし今回の事件に関して、日本で報道されているように中国政府の報道規制がなされているとしても、ありえない話ではないと思うが、それは不確実な数字を安易に公表することを避けているのだと信じたいところだ。いま、南京は急速に都市化が進んでおり、地下鉄工事の労働者などが増えるなど、改革開放から取り残された形の農村からの人口流入も盛んになっている。本来静かな町が、何が起きても不思議ではないくらいの混乱を内包しているもおかしい、とは思ふ。

2002/09/16 (月) 本場よりおいしい? 京都の中国料理

中国への旅からまもなく一ヶ月。このところ中国料理から遠ざかっていた。日本で食べる中国料理ほどには本場の料理が美味しくなかったのも、その後遺症だろう。久しぶりに四条烏丸の香港風ダイニング「口福門」でランチを食べてみると、中国のどこの町で食べた料理よりもわたしの味覚を満足させてくれる。

2002/09/17 (火) あら、そうだったの?

今日も引き続き中国のこと。まず、14日に発生した南京の殺鼠剤混入と思われる食中毒・殺人

事件は、日本の新聞社のネットニュースを見ると、新華社通信インターネット版に元従業員が容疑者として逮捕されたと報じられたようだ。新華社は死者38人と伝え、香港の主要新聞は100人は上回ると報じているのだという。日本のマスコミ自体が二次情報を文字通り受け売りするので、三次情報の受け手にとっては、まるで伝言ゲームのようである。

「交通事故で一人や二人死亡してもニュースにはならない国」だと聞いたのは、この夏のことだった。中国の大きな町にはたくさんのタイトルの新聞があり、宅配の代わりに子どもや女性たちが朝の公園やターミナルなどで売っている。しかし、大事なことは知らされるべき情報が伝わっているかどうかということだ。どんなにたくさんの種類があっても紋切り型で画一的なニュースしか載っていないのであれば意味がない。終戦の日に南京虐殺の慰霊碑を訪れたわたしたち日本の訪問者たちのことを、あのとき、7つか8つのカメラが取り囲んだ。勿論、報道関係者には事前に南京市によってリークされたもので、しかも取材されるのは毎年のことなのだが。

そのように、かなりの中国最前線であるわたしがみても、中国のジャーナリズムの仕組みについてはいささか懐疑的なのだが、日本の環境工学の専門家が書いた岩波新書の『中国で環境問題にとりくむ』（宗方正毅・著）を読んでいると、ここに挙げられているような中国の危機的な状況を、いったいどれほどの中国国民が認識しているのだろうか、という気になる。中国全土の3割近くが酸性雨による被害を受けているといい、そのことがそろそろ中国経済の発展にとって足引っ張りになりはじめているとある。毎年2100平方メートルずつ砂漠化が広がっており、このままだと100年で中国の耕地はなくなってしまうという予測もある。

特にここには、わたしたちも訪れた重慶（チョンチン）のことが取り上げられていたので、目が釘付けになった。そうか、蒋介石の別荘跡のある景勝の地・南山から見下ろした重慶の町の嘉陵江と長江の交わる地点が、やけにスモークで見通しが悪かったのは、曇り空のせいではなく、あきらかに大気汚染だったのだ。重慶は中国の代表的な酸性雨の都市である...と書かれてあるのを見て、わたしは思わず「アチャ〜ッ」と声が出そうになった。

2002/09/18（水）語られる事実と語られない真実

これは中国に限らず初歩的な情報操作のテとして「明らかにしている事実と間違いはないが、明らかにされない部分に重大な真実が隠れている」という場合がある。

たとえば、重慶は神戸と同じように坂の町だということで、神戸のHさんが「神戸は他の都市に比べたら心臓病の割合が少ないのだが、重慶は？」という話を出した。すると案内人のCさんは、嬉しそうに「そうなんです。重慶のひともしよく歩きますから、心臓病に罹る人が少ないんです」と言った。はっきりしたデータがあるのかどうか知らないが、おそらく事実だろう。車の外にみえる重慶の人々は誰も太ってはいない。仮に心臓病が少ないとしても、それは一種の文明病ともいえる性質のものなので、何はともあれ推測できるのは、欧米や日本とちがって重慶の民衆は過度にグルメな生活からは無縁のせいで健康を保っているにちがいない。

なにしろ半端じゃない急坂と水運の町で、「棒々鶏」の語源という「棒」を担ぐ荷役人の姿が重慶では今も生きているのである。船や大型バスが到着すると両端に荷物を固定するためのロープ状のものを付けた棒を持って、小柄でも引き締まった体の男たちが集まってくる。わたしたちのツアーの仲間に60代の方がいたのだが、男たちは彼が「自分で持って歩ける」というのに、シツコク荷物を持たせろといって付き纏ってきた。男たちも必死なのである。深刻な失業問題もあるというから、仕事がないと荷物を担ぐことになるのだろうが、しかし、彼らが荷物を担いで運ぶ姿を見ていると、俄かに勤まる仕事ではないと思う。キャスター付のスーツケースが増えて彼らも商売あがったりかもしれない。それにしても、頻繁に町で見かける、この商売道具の「棒」を見てわたしは最初クリケットかホッケーのようなスポーツゲームの道具かと思ったが、その発想自体が中国を見誤っているのかも。太極拳やダンスなど、都会の公園では朝から市民が集まって体を動かしているが、お金のかからないスポーツばかりだ。投資の必要な器具を使うスポーツは育ちににくい。

さて、知らされている事実が「心臓病の少なさ」なら、知らされない真実というものもある。宗方さんの本によると、大気中のSO<sub>2</sub>の濃度が高い酸性雨の町・重慶は肺がんの死亡率が中国でもトップだという。わたしたちを歓待してくれた重慶

市役所の関係者の方々が意図的にそのことを隠

そうとしたとは思いたくないが。

＝＝

# 重慶での爆撃生存者をむかえての座談会での発言

門永 秀次（もんなが しゅうじ）

＝＝

おはようございます。神戸からやってきた門永秀次といします。よろしくお願ひします。神戸南京心連心会の活動についてかんたんにお話ししながら、きょうな重慶を訪れて勉強をしようと思ったかお話しをしたと思います。

私たち神戸南京心連心会は、日中間の戦争の歴史とくに南京大虐殺事件についてより深く知って、その事実を日本の市民のなかに広げていく活動を通して日本と中国の民衆が一緒に平和な未来をつくっていきたいと念願し、いままで活動してきました。しかし日中間の戦争の歴史が南京事件だけではないことはいまでもありません。神戸南京心連心会は1997年から今年まで連続6回の訪中団を派遣していますが、毎年8月15日は必ず南京虐殺記念館前で中国のみなさんと一緒に追悼集会を行うことにしています。追悼集会と南京大虐殺の現地フィールドワークを中心に活動してきました。南京での活動のほかにも今までに、安徽省淮南炭坑の万人坑、撫順戦犯管理所・平頂山遺骨館・瀋陽の九一八記念館、山西省太原の日本軍による性暴力被害にあった大娘たちの村、ハルビンの七三一部隊などの旧址を訪ね、去年は杭州湾に行き日本軍第10軍が上陸した地点と南京侵攻のルートも確かめてきました。これからもできるだけ多く歴史の現場を訪ねてみたいと思っています。

さて1945年3月17日、私たちの住んでいる神戸もたいへん大きな空襲を受けました。アメリカ軍B29爆撃機によって、まちの工場・建物・市民の住居は破壊、焼き尽くされ大勢の一般市民が命を落とし傷ついたり、大きな犠牲を被ったわけです。毎年3月17日には「神戸空襲を記録する会」という市民団体の主催で空襲の犠牲となった方たちの霊を慰めるために、さらに二度と再び悲惨な歴史を繰り返さないためにということで合同慰霊祭が行われています。

日本では神戸空襲を前後して、東京や大阪をはじめ全国の多くの都市がアメリカ軍の爆撃を受け破壊されてしまいました。B29爆撃機によるこの爆撃は、ちょうど日本軍が重慶に対して行ったと同じように軍事目標と非軍事目標とを区別しない、いわゆる無差別爆撃でした。この無差別爆撃が行き着いたところが、8

月6日広島と8月9日長崎への原爆投下であったことはご承知のとおりです。広島への原子爆弾の投下がどれほどひどい被害をもたらしたかは、このまえ王群生先生はじめ4の方が重慶から広島を訪れて直接ご覧になったので私の方から申し上げるまでもないと思います。

戦争が終わって、たいへんな犠牲を払った上で日本は新しい国に生まれ変わりました。憲法で戦争することを禁止して、軍隊は持たないと決めました。戦後、その憲法の抛りどころとなったもの、あるいは日本の平和運動の抛りどころとなったのは、戦争の時に全国のあちこちで経験した空襲や広島・長崎の体験でした。いまもう戦争が終わって57年が経ちました。この間に国際情勢も大きく変わり日本の社会もずいぶんと変わりました。政府の方は戦後すぐの時期からアメリカと一体となって日本の再軍備を進め、じつはいまの段階では、日本が戦争をするための準備に非常に力を入れはじめていているという時期を迎えています。こういう状況に際して、いままで平和運動の抛りどころにしてきた私たち自身が日本人が戦争でたいへんな被害を被った。アメリカ軍の無差別爆撃で原爆で、被害を受けた。これだけを抛りどころとしていたのでは、これからの平和を守っていくためにはだんだんと役に立たなくなっている。戦争の経験が薄れていっている時期を迎えています。戦争で日本人が犠牲を受けた。そのことを一面的に強調するのではなくて、中国との戦争の中で、アジアでの戦争の中で日本が何をやってきたのか。そのことを日本人がきちんと知っていくことがたいへん重要になってきていると、私は思っています。

こういう中ですが、重慶に対する日本軍の無差別爆撃という歴史的事実は、日本の中ではあまり知られていません。南京大虐殺のこともまだ日本の中ではよく知られているとはいえませんが、それでも日本の中に南京虐殺を否定するグループが存在し、この人たちとの論争があって少しずつ南京であったことも知られています。重慶に関してはそんな論争もないわけですからよけいに日本人にとって知る機会がないのです。

私は重慶大爆撃のことを知る意味が二つあると思っ

ています。一つは、日本軍がやった重慶爆撃の現地に立って見て、「ああ、ここであのときにたくさんの重慶民衆が傷ついて亡くなっていったんだ」ということを感じたり、あるいはきょうみたいに生存者の方々の証言を聞き、中国での研究成果を勉強することによって、もっともっと重慶爆撃の歴史を知ること。不幸な歴史を繰り返さない、そのために重慶で見たこと・聞いたこと・学んだことを日本の中に広げていく。このことが、きょうここで勉強することの第一番目の意義だと思います。

もう一つは、私は重慶にやって来る前に日本で前田哲男さんの著作を読んで少し勉強してきましたが、重慶に対して行われた爆撃の性格・本質、「無差別爆撃」「戦略爆撃」ということに関してです。いまもアメリカ軍はアフガニスタンでタリバンに対する爆撃を継続しています。このアメリカ軍の爆撃も、私は無差別爆撃だと思います。多くの罪もない一般のアフガニスタン民衆が毎日のようにたくさん亡くなっていきます。これからイラクに対する爆撃も行くとブッシュが公言しています。湾岸戦争では実際にイラクに対する無差別爆撃・攻撃が行われて、しかもこのときの爆弾は劣化ウラン弾という核兵器まがいが使用され、いまもた

いへんな被害がイラクに残っています。私はこのイラクに対する爆撃もアフガニスタンに対する爆撃も、こうした無差別爆撃・攻撃の原型がじつは1938年から日本軍が重慶に対して行った無差別爆撃にあったと考えるようになりました。そういう意味では重慶に対する日本軍の無差別爆撃＝重慶大爆撃（重慶大轟炸）をもう一回勉強し直すということは、これからの世界でこういう無差別爆撃をなくしていく。そのために民衆が手をつないでいくうえでの一つのステップだと考え、きょう重慶でみなさんのお話を聞くことにしました。きょうこれから勉強することをもとにして、私たちは世界の平和を守る運動にもぜひ積極的に取り組んでいきたいと思いますし、日本の中では日本がまた「戦争をする普通の国」になっていこうとしていることに対して抵抗のたたかいを続けていきたいと思っています。

と、いうことできょうはよろしくお願いします。ありがとうございました。

No.1 南京の真実と 小 城 結 以

この本を読んだとき、かけは、この夏の私の体験からである。

私は今年の夏、日中戦争の事態を学ぶ為の研究旅行に参加した。私にとつては二回目となる中国である。中学の頃はただ事実を驚いただけだ。たので、今回はもう少し大きな視野から事実を目を向けようと思つた。大勢の虐殺被害を出した南京と無差別空襲で甚大な被害を受けた重慶を訪れた。南京では、七二歳の生存者「夏淑琴さん」が、目を潤ませながら語ってくれた。当時九歳の彼女は日の前で日本兵によつて祖父を殺された。二人の姉へ十五歳、十三歳が、強姦され殺傷されるのを目撃した。彼女は幸い助け出され、国際安全区の委員によつて保護された。この本の著者であるドイツ人のラーベ氏とアメリカ人のマギー氏が親切に世話をした。私はその話を聞き、初めて二人の存在を知り、どんな活動を行つていたのかと、とても興味を抱き、真の理解を少しも得る為にと、日本に帰り直ぐに、この本を読んだ。この本はラーベ氏が主に南京の国際安全区の代表者であつた頃の日記をまとめたものである。日記は当時の悲惨な現実を、とても生々しく物語つていた。読み終えた後、私は何故「南京大虐殺は幻

No.2

「それは、戦争時によくありがちな事である。事象」と主張する日本人がいるのか、理解出来ない思ひがした。その方々に對して「この本を読んで下さい。現地に行き、被害について見直すくらいに調べて下さい。そうすれば、さつと虚構を受けると思ひます。」と、私は言いたい。

この本の中で、私が最も感動を受けた言葉は、「残虐行為が単に、日本人だけでなく人類共通の問題である事」と語つてゐるラーベ氏の言葉である。その当時の日本兵の多くは戦場に來るまでは犯罪者でもなく、正常な判断力を持っていた。人々の集団でも決してなかつたはずだ。無差別の虐殺に加担した人々も、家にいた頃は、良い夫であり良い父であり、普通通の市民だつたのではないだろうか。敵は全て殺せと叩き込まれた時代の所為だ。たのたと思ふ。もし私が、その時代に生まれ教育されていたらのちと考へると、他人事とは思ふまい。

重慶無差別爆撃は南京大虐殺ほど一般に知られてない。私も初めて知つた事実である。神戸大空襲もとても残虐な結果をもたらした。重慶ではその何倍もの被害を蒙つてゐる。空襲当時の写真の中で、女の息の女性の

胸に赤ん坊が抱きついて乳を吸っていた。写真があった。その写真の映像が、鮮明に私の脳裏に焼き付いて離れない。ラーバ氏はもろと残酷な光景を毎日の様に、目にしているわけだが、その状況の中で、よく意志を固げず、自己犠牲の精神を保ち、救済活動に向かっていた。たとえ大変感謝を受けた。彼がナチ党員であったという事実も衝撃的だった。

私は中学生の頃、何處か学級会などで、現地を見聞した南京大虐殺の話をしたが、言いたくは中国が好きなのね。と、しか受け取って貰えず、悲しく、とても悔しい思いをした。ラーバ氏は、故郷ドイツに帰国した後、南京での事を人々に話したが、日本との同盟関係を優先する人達によって逮捕されてしまった。私以上に氏の心境は複雑だったと思う。

当時のアメリカ政府の日本への戦略に対しては、私は到底賛成出来ない。広島、長崎への原爆投下は、今も深い傷跡を残している。しかし、原爆の恐ろしさを知るのと平行して、原爆投下に至る日本の責任をも、世代を受けつぐ私達は覚悟していくべきだと思う。

今でも、日本の終戦により負傷、強姦などの痛みを負った方が存命されている。その方達に日本の政府は、正式に謝罪・賠償を行っていない。二年前中国で話を聞きに見舞った「伊林香さん」は、性暴力や病気をその身に

受けた上に、終戦後の村の人々から「日本人にサライグイヌした」とか、子供が汚れているとかいう理由で迫害され、良を清めようとして来た。私の手を握り涙を流して語ってくれたのが印象深い。その方は、その半生後に亡くなった。その様な老年の方々が今でも多く苦しんでいる事を、深く見つめ直し、何らかり行動を省か取るべきではないだろうか。

日本が戦争に巻き込まれ、私の愛する人か生命を無益に失う。そのような日が永遠に来ない事を強く望みたい。しかし現在、世界にはこの瞬間も愛する人の為に涙を流し、戦争という偉大の知れない物に翻弄される人々が存在する。その涙が消える日はあるのだろうか。私達一人一人が、憎しみという怪物を心の奥で育ててしまっている。それは争いを再生するだけだ。これは何としても私達の世代が阻止しなければならぬ。

この残酷さを世のこの目で確かめておきたいのだ。いつの日か日撃者として語る事が出来る様に。これ程の残忍な行為をこのまま闇に葬っていくものか。ラーバ氏の言葉

意義深いものになった重慶への旅。佐藤加恵

おら次訪中国員は、いつもより多い20名が  
した。今年の特徴は、1972年日中国交正常化  
より30周年をむかえたことと、1937年の南京  
大虐殺より65周年になり、いろいろな意味で  
1つの節目であらうと思います。

二つ目の特徴は南京3日間、重慶の最後の  
1日計4日間、雨に降られたこととです。滞在  
8日の内半日が雨というのは初めての事です  
し、過去5回は、中国の夏の暑さに驚きまし  
たが、湿度のぬくい日々で、過ごしやすいま  
でした。

南京はいつ行っても、戴さん達の笑みで、  
いろいろ新たな発見があり、新たな出会いが  
あります。今回は、いつもと変らない費用で  
5つ星ホテルのトリートメント(南京希爾頓)に泊  
れたことで、これにはアジア旅行になれた初  
めての人ちびっくりにしていい。南京の3  
日間、お。と雨で、今をさして建物から出る  
市や山中のファールワークに行くと、1937  
年代の南京で、戦時中とはいえ、日本軍の暴

虐から逃れず、赤ん坊や老人をつれて雨中  
をにげまじった苦難の日々が重なり、きこ  
暗く、重い印象となりました。こういう追体験  
もあるのだとぬかすみの道を歩きました。

そして始めの重慶。

南京大虐殺は日本・アジアはあるか、世界の  
の国々に伝、伝わるまにみえる悪虐非道な犯  
罪史でした。重慶の地では同じ1937年11月よ  
り戦時臨時首都となり、そこから、日本海軍によ  
る差別の大爆撃が長期間にわたってくり返  
されたのです。オニ次世界大戦の末期にアメ  
リカ軍によってくり返された日本主要都市  
への空爆のことは、現在も歴史にとどめま  
く市民運動となっています。

各地のそれらのアメリカ軍による空爆、原英  
と云われる歴史は、この重慶市民への大爆撃  
にあったのです。中国の日本政府と日本軍  
部の戦争犯罪は、中国各地で~~数多く~~なされています  
が、この差別大空爆は南京大虐殺と共に重  
要な歴史事実であるといえます。その日固で、



かなりくわしく知ることかできたのは、私達の企画を計画立案して下さる北京の国際友誼促進会から重慶人民政府外事辦公室へ話し合いを通じて、たかだかと両市の方々に感謝していきす。

8月19日に重慶市文史研究館での座談会でお会いした幸存者と研究者の数人が「8.6集会」ヒロシマから細菌戦と重慶大空爆も考之る実行委員会」招きで来られた方々と知りました。その事務局としていたのが「南都大虐殺60年実行委員会」の代表の一人、由木栄司氏です。「えーっ！神戸は重慶に行ったの!!」と電話のむこうで驚いた声を出した鎌木氏。

1つの事柄にわかれつつも、かならずアレかつであつたが、広がりが出てくるものだと今さらながら思ひせられました。今回重慶への旅は、その「先事実を知ると共に、近代史上、空前の凄苛烈を極めた日本軍の無差別大空爆の戦争犯罪を三人が、多くの人々に語り伝える努力をしていこう」と、再び同

い過ちをくり返さない決意をした私達の努めだと思ふのです。日本が現在、平和とは送行して、いる道を歩んで、いることを、深くうまいながら――。

南京・重慶を訪ねて  
(神戸・南京をむすぶ会第6回訪中国に参加して)

以前から、神戸学生青年センターが中心になって、このツアーを行なっていたことは知っており、一度、ぜひ参加したいと思っておりました。今回も出発の前日まで長野でセミナーを行なっていましたし、同じ日程で韓国出張の話も飛び込んできたり、どうなることかと不安もありましたが、何とかその日程を最後まで確保することができて幸いでした。

加えて、私同様、いつも超多忙で、例年であればフィリピンに行っているはずの池住圭名古屋学生青年センター総主事も、土壇場で参加できることになったことは、非常にラッキーだったと思います。でも、事務局には少なからずご面倒をおかけしたと思いますので、お詫びしたいと思います。野村も池住も、これまで、結構、いろいろな国を訪れる機会があったのですが、なぜか中国には行く機会がありませんでした。池住は、香港で行なわれた会議には出席したことがあるそうですが。

いずれにしても、二人とも事前の準備学習を何もしないまま、どちらかという、私などは気分は夏休みで、休養をかねて参加したような感じでしたから、皆さんには、さぞ、不真面目に映ったのではないかと心配しています。

今回の訪中における私の最大の目的は、南京大虐殺記念館の訪問でした。1937年に南京で何が起こったのか？ それはなぜ起こったのか？ どのような状況だったのか？ こうしたことについて、少しでも知りたい、直に学びたいというのが願いでした。もちろん、街の雰囲気からは、当時のことを想像することは簡単ではありませんが、しかし、訪れた万人坑や城壁や慰霊碑などから、当時の模様をうかがい知ることとはできました。

なぜ大虐殺が起こったのかという疑問については、松井石根中支那方面司令官の下で南京攻撃に上海派遣軍司令官として皇室の浅香宮鳩彦が参戦していたことと関係しているという話（誰から聞いた話だったか覚えていない）は興味深く思いました。皇室を守るために徹底的な掃討作戦になったということはある話だと思いました。

いずれにしても、南京は名古屋と姉妹都市関係を結んでいることから、名古屋にいる私たちとしては、南京との関係を深めるいく必要があると思われました。

重慶への爆撃が、原爆投下につながっているという門永さんによる解説もおもしろく思いました。また、なぜ重慶への執拗な爆撃がなされたかについても、蒋介石や周恩来の住居、加えて大韓民国の臨時政府の跡などを見学することによって、これだけ権力というか、重要人物が集まっていたんだと納得した次第です。

私のもうひとつの関心は、日本のODAによる三峡ダム見学でした。ひょっとしたら長江の川下りができるかと楽しみにしていました。ODAによる援助が、中国ではどのような問題を引き起こしているかという点についても情報を得たいと思いました。川下りについては、サンセット・クルーズで、ダム見学については、模型と絵画でお茶を濁すことになりましたが、次回にはぜひ実現したいと願っています。しかしながら、やはり気になるのは、ダム建設にともない強制移住させられた100万人の人々、殊にその多くが少数民族であるという辺りに、最近ではインドネシアのコトバンジャンダムに象徴されていますが、他の国でのダム建設に共通する問題をはらんでいるように思います。

初めて中国を訪れて、驚くことがたくさんありました。さすがに中国は国も大きいだけあって、何でも大きな思いました。たとえば電柱の上に乗っているトランスの巨大さ、エアコンの室外機の巨大さ。そして上海、南京、重慶と訪れたいずれの都市でも感じたのですが、これほど近代化しているとは思いませんでした。これは、多分に無知と偏見による驚きなのですが、上海などはある程度予想していましたが、南京にしても重慶にしても、あれほど高層ビルが立ち並び、道路も整備されており、車の数も多い都会だとは、まったく認識不足でした。

広大な大地、長い歴史、そして日本との関係など、これからの私たちにとって、また、日本の今後の歩みを考える上でも、中国に関して学ぶことはたくさんあるし、大切なことだとあらためて感じさせてくれた旅でした。

お世話になった皆さんに心から感謝いたします。またご一緒していただいた皆さんにも感謝と共に、いつかまた再会したいと願っております。では楽しい報告会でありますようお祈り申し上げます。

2002年9月20日  
池住 圭  
野村 潔（代筆）

神戸・南京をむすぶ会第八次訪中国に参加して



中国友好訪日神戸日本歴史館文庫  
重慶大轰炸史実座谈会

神戸・南京をむすぶ会  
第六次訪中国(全二十人)  
は今年も八月、例年のよ  
うに南京での大虐殺追悼  
集会に参加し、フィール  
ドワーク。その後、重慶  
で「重慶大爆撃」の現地  
交流、市内に残る爆撃の  
跡を訪ねた。

重慶は中国四番目の直  
轄市で、人口は現在三千  
二十万人・面積八万二千  
km<sup>2</sup>。上海から長江を遡る  
こと二千五百km、長江と  
その支流嘉陵江の合流点  
に位置する。日中戦争当  
時は、南京を失った国民  
政府(蒋介石政権)の陪  
都とされ、抗日戦争の  
「大後方」であった。

年秋までの約三年間、初  
回から最終まで数える  
五年余にわたって加えら  
れた、当時の戦時国際法  
に照らしても違法の無差  
別攻撃であった。

### 民衆が被った 被害は？

中国民衆が被った被害  
は当時の国民政府によれ  
ば、一万二千人近い死  
者・一万四千人余の負傷  
者・三万を越す家屋の損  
壊。しかしこの数字が、  
政権の面子で不当に低め  
に抑えられていることは  
いまや常識だ。

### 歓迎！爆撃史実 座談会

「今日は絶好の空襲日  
和」という戦意高揚二  
ユース映画のアナウンス  
を聞き、年輩者は案外  
「重慶爆撃」を知ってい

世界に知られている最  
も悲惨な被害は、三九年  
五月三日・四日の爆撃  
(二日間で四千人が死)  
と「六・五陰謀案」と  
呼ばれる四二年六月五日  
の防空洞での惨事であろ  
う(被害者は数千人から  
一万人が、今となって  
は正確に知る術もない)。

団歓迎 大爆撃史実座談  
会」は、訪中国と中国側  
から文史研究会・人民政  
府の研究者や生存者、被  
害者が参加し、この八月  
広島を訪れたばかりの幸  
存者・高鍵文さんは、当  
時の傷を残す足元をわれわ  
れに見せながら証言をし  
てくれた(証言の内容は、『週刊新社会』八月二〇  
日号参照)。爆撃で右腕  
を失った佐古翠さんは、  
シャツを脱ぎ身体を見せ  
てくれた。

大爆撃をテーマに重慶  
を訪れる日本のグループ  
もほとんどなく、われわ  
れの訪中団は大変な歓迎  
を受け、地元テレビ・新  
聞の取材を受けた。

八月一九日重慶市文史  
研究館で行われた「訪中  
神戸からの参加者は、  
四五年三月二七日の神戸  
空襲に触れながら①重慶  
空襲の事実を日本で広げ  
る努力②アフガンなどで  
今も続けられる民衆への  
無差別攻撃に、重慶の歴  
史を鏡にしながらともに

## 今も続く民衆への無差別攻撃 「重慶大爆撃」の現地に学ぶ

世界平和を目指してい  
きたいと述べ、交流を深め  
ることができた。

「十八梯」という惨案  
跡地の見学は、われわれ

に改めて「重慶大爆撃」  
がどのようなものであっ  
たのか教えてくれた。

神戸・南京をむすぶ会  
門永秀次

新社会兵庫 No. 180  
02. 9. 24

# 「終戦記念日」各国で過ごし10年



日本では「終戦記念日」とされる8月15日。天理市立北中学校夜間学級教員の福島俊弘さん(48)は10年前から毎年、この日をアジアの各国で過ごしてきた。戦時中の日本軍の加害に対する厳しい言葉を投げかけられたり、若者に歴史を伝えようとする人々に感心したり。福島さんは「戦争を忘れまいとする強い姿勢」を感じたという。

## 天理の教員・福島さん

夜間学級では、日本の生徒以外にも韓国、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)、中国、タイ、フィリピンなどの出身者計72人が学ぶ。生徒と接する上で、福島さんは「アジアの国への日本の加害の部分をもっと知る必要がある」と考えた。

まず93年に訪れたのは韓国。ソウルで集会に参加し

アジアは戦争忘れぬ

## 語り継がれる大爆撃

た際、「日本人は帰れ!ここに来なくても、日本のおじいさんが何をしたかよく知っているはずだ」と怒鳴られた。

94年に訪ねたマレーシアでは日本軍に焼き打ちされた中国系住民の村を見た。「広島、長崎への原爆投下は仕方なかった」という人がいた。「被爆した広島も奥に軍港があり、アジア侵略の最先端にあった。日本は自分たちは被害者という意識でも、アジアの国々はそう思っていない」と感じた。

95年には北朝鮮で、解放50年統一集会和南北統一のためのデモ行進に。96年から3年間は韓国で、中国やロシアに離散した

## 日本への厳しい言葉も

アジア各国で「終戦記念日」を過ごしてきた福島俊弘さん。今年の訪中は現地の新聞でも紹介された。天理市丹波市町で

家族の総会などに参加した。

99年から4年間は中国へ。今年は8月14、21日に南京と重慶を訪ねた。南京にある「大虐殺記念館」の追悼集会に出席。重慶では、日本軍の大爆撃の生存者から話を聞いて、多くの人が犠牲になったことを知った。町で福島さんが若い女性に尋ねると「教科書にはなかったけど、近所の人に話を聞いたので知っている」。若い世代に伝わっていることに感心した。

日本で小泉首相らが靖国神社を参拝したり、有事法制が検討されたりしている状況を見て、福島さんは「他のアジアの国と比べると、日本は戦争の恐ろしさを忘れてしまった、あるいは忘れたがっているような気がします。嫌なことを忘れて前を向こうというだけでは、同じ間違いを繰り返してしまう」。福島さんは今後も、アジア各国に学びたいと話している。

ひとみ



事実を次の世代に

「一九三八年から三年 知らなすぎた」  
半で二百十八回も攻撃 佐藤加恵さん 神戸市  
し、三万五千人を死傷さ 東灘区本山北町は、今  
せた旧日本軍の重慶大爆 夏で六度目となった「神  
撃。南京大虐殺などに比 戸・南京を結ぶ会訪中  
べ、その実態を私たちは 団」(二十人)の団長。

南京で犠牲者追悼式典に  
参列した後、重慶を初訪  
問し「逃げ込んだトンネ  
ルの入り口に爆弾が落と  
され、蒸し焼きになった  
り圧死した人もたくさん  
いた」という生存者の証  
言を現場で聞いた。

重慶の戦跡をたどる日  
本人はほとんどいないと  
いい、訪中団は地元紙六  
紙とテレビで取り上げら  
れた。「次の世代に事実  
を伝えるのが私たちの使  
命」。報告会を二十日午  
後六時半から、神戸市灘  
区山田町三、神戸学生青  
年センターで開く。



日本首个民间访问团来渝了解重庆大轰炸史实时表示

# 把真相公之于众

昨日,重庆市较场口惨案遗址和十八梯惨案遗址迎来了一批特殊的客人:他们作为首个来渝了解重庆大轰炸真相的日本民间访问团,向当年重庆大轰炸死难者遗址敬献了花圈。

据了解,访问团主要来自日本神户的民间人士,他们都是日本反战成员和反右倾和平人士。之前,他们已发现日本政府有太多太多的罪行没有向日本人民交代。直到近日重庆大轰炸代表团到日本访问后,他们才知道当年日军暴行给重庆带来的惨重破坏。代表团此行来渝的目的就是为了了解重庆大轰炸的真相。

在较场口惨案遗址,访问团向当年惨案的死难者遗址敬献了花圈,其中一位女士的手中始终拿着一个“祭”牌。他们在当年日军暴行造成的惨案冤魂面前为前人的暴行而忏悔。

在重庆市文史馆,大轰炸幸存者、受害者代表高健文和伍占琴将已经伴随他们50多年的伤痕展示给访问团成员,播放的历史影音资料也真实再现了当年日军暴行。团员们友秀次先生称,看了幸存者的创伤和历史资料电影片,他们才真正感受到重庆大轰炸给重庆造成的破坏和伤害是如何的严重。

访问团团长佐藤加惠女士告诉记者,她不敢相信这(重庆大轰炸)是真的,太残忍,太血腥了,与他们在来渝前了解到的和能想象到的,相距甚远。日本政府怎能将这么血腥的历史完全抹杀呢?事实简直让人无法想象。

门友秀次先生表示,在他们访问团中,不少成员是教师,他们回日后将把自己看到、听到和感受到的重庆大轰炸事实真相告诉给广大的日本国民和青少年学生。希望大家以此为戒,努力让和平的阳光普照大地,永远远离战争。 记者 王先敏 实习生 陈艳梅



日本首个民间访问团来渝了解重庆大轰炸史实时,在较场口惨案遗址和十八梯惨案遗址敬献花圈。